

2018年度 日本社会心理学会「若手研究者奨励賞」候補者の選考経過と選考結果

2019年1月10日

本年度の「若手研究者奨励賞」受賞者の選考経過と選考結果をご報告申し上げます。本年度は28件の応募があり、4名の選考委員による厳正な審査の結果、以下の6名を受賞者と決定いたしました。選考委員の先生方に各自、講評を書いていただきましたので、あわせてそちらもご覧ください。

「若手研究者奨励賞」選考委員長 唐沢かおり

受賞者（五十音順）

1. 伊藤 篤希（いとう あつき） 環境への適応戦略としてのヒエラルキーの実態の解明 京都大学博士課程1年
2. 鈴木 啓太（すずき けいた） 暗黙理論の文化差生成・維持メカニズムの検討：課題変更可能性に着目して 東京大学博士課程1年
3. ターン 有加里 ジェシカ（たーん ゆかり じぇしか） 「あなたがやるなら私はやらない」か「あなたがやるなら私もやる」か—ボランティアのジレンマにおける他者の協力意図と2種類の公正感受性— 東京大学修士課程1年
4. 早川 美歩（はやかわ みほ） 他者の身体を纏えば心も染まるか：VRによる身体所有感の喚起が利他行動に及ぼす影響 名古屋大学修士課程1年
5. 本間 祥吾（ほんま しょうご） 環境変動性に対する適応としての心と社会の共進化：進化ゲーム・シミュレーションを用いた理論的検討 北海道大学修士課程1年
6. 横山 実紀（よこやま みき） 公共的な合意形成場面における無知のヴェール下での議論の有効性について 北海道大学修士課程2年

【選考経過】

1) 募集

5月30日に、広報担当の宮本先生に依頼して、今年度の募集要項と応募用紙を学会のHPにアップするとともに、募集開始をメールニュースで会員に告知をした。締め切りは例年通り9月30日とした。

2) 選考委員選出と第一次審査

応募総数28件につき、第一次審査を行った。選考委員は応募者の指導教員、共同研究者ではないことを条件に理事から2名、一般会員から2名を選考委員として依頼し、下記

の4氏について会長と常任理事会の承認を得た。

選考委員（敬称略）

理事より：堀毛一也（東洋大学）、池上知子（大阪市立大学）

一般会員より：新谷優（法政大学）、村上史朗（奈良大学）

審査方法については、従来の手順を踏襲し、選考委員はお互いに匿名としたうえで、個別に各応募に対して、A（優れている）、B（普通）、C（やや劣っている）を付与することで行った。なお、A評価は5本以内とした。選考委員長は、指導学生からの応募があったため、審査には加わらなかった。

3) 第二次審査

第一次審査結果に対して、A評価は40点、B評価は10点、C評価は5点をそれぞれ与えて得点化し、4名の選考委員の合計点を算出した。得点が上位の10名を第二次審査の対象として、選考委員間でメール審議を行った。

メール審議では、研究の学術的価値、予測される知見の新奇性などについての意見が提出され、意見交換の結果、最終的な評価において100点以上を得た上位6名を受賞対象とすることで合意した。

以上

2018年度「若手研究者奨励賞」選考委員4名による講評

堀毛一也先生（東洋大学）

本年の応募は28件とほぼ昨年並みであった。内容的には昨年にも増してレベルが高く、評価が難しかった。ただそうした中で受賞対象となった6編は、とりわけ独創性と計画性に優れていたように思う。受賞された6名のうち4名については、審査委員がほぼ一致して高い評価をつけた。残る2名については、特定の委員の推薦により全員で内容を吟味した結果、受賞にふさわしいという結果になった。昨年は得点の高い方々のみを対象としたが、本年のような推薦のしかたも論議が深まりよい方式ではないかと感じた。ひとつだけ気になったのは申請者が、ご自身の研究計画なのか、指導教官の発想なのか、必ずしも明確に記載されていないことである。とりわけ、修士課程での申請では、指導教官の関与が大きくなり、本人の評価をおこなっているのか、指導教官のプロジェクトの評価を行っているのか、区別がつかなくなるというジレンマを感じた。昨年問題となった倫理的配慮は、申請全体に特に問題ないと感じたので、次年度は課題として、こうした点にも配慮した申請書の作成を心がけていただければと考える。

二年続けての審査で、本来なら辞退すべきとも考えたが、最後の貢献として役割を務めさせていただいた。長年にわたるご指導・ご配慮に感謝申し上げますとともに、若手の先生方の一層のご活躍を祈念いたします。

池上知子先生（大阪市立大学）

昨年度に引き続き、本賞の選考委員を務めることになりましたが、昨年同様、本年も意欲的ですぐれた内容の研究計画が数多く見受けられました。昨年の講評でも申し述べましたように、私は、研究の評価においては、着想が斬新で独創的あるか、方法論に創意工夫がみられるかの2点を重視することにしております。また、おこがましいことを申せば、真に創造的な研究とは、独創的で斬新なアイデアを科学的根拠に裏打ちされた方法論を用いて検証することによって達成されるものと考えております。さらに、いかに理論志向の基礎的研究であっても現実の人間や社会の問題に根ざさないものは、学術的価値を生み出さないのではないかと考えています。元来、学問研究は人類の福祉と幸福に資するために存在するものだからです。もちろんそれは、眼前の課題解決に短期間で役立つものである必要はなく、中長期的にみて、結果的に人間社会の発展に寄与するものであってよいと思います。その意味では、人間や人間社会の本質、その起源に迫る深い洞察に支えられた研究には魅力を感じます。

今回、最終候補に選ばれた研究課題の多くが、上記の要件を満たすものであったと考えています。若い研究者のなかに、そうした資質を備えた方がおられることを見だせたことは、望外の喜びでした。選考委員は負担も大きいのですが、新たな研究の芽吹きに出会える機会でもあるとすると、それを補って余りあるものがございました。

新谷優先生（法政大学）

今年申請された研究計画は、「きらりと光る魅力的な研究」と「悪くはないけど何か足りない研究」の二つに分かれたような印象を受けました。前者は他の審査員からも推薦されており、見事受賞に至っています。優れた研究計画は、理論的な基礎の上によりしっかりとした仮説が立てられ、方法も練られています。しかし、光る研究にはそれ以上に結果が楽しみだと感じられたり、どのような結果になろうとも、理論的・実用的な貢献が期待できる何かが含まれているように思いました。その「何か」とは、研究の意義です。なぜこの研究をする必要があるのか、なぜ重要なのか2ページ目の裏の小さいスペースだけでなく、表の研究目的の欄にもしっかり書き込まれていると、申請書の説得力が格段高まるように思いました。ちなみに「これまで検討されてこなかったから」というのは研究をする理由にはなりません。穴がないから穴を掘るのではなく、ここに穴を掘ったらどんな素晴らしいものが出てくるのかを明示していただきたいと思います。申請書の1ページ目が魅力的であると、八口一効果からか、2ページ目の方法論の多少の粗さは気にならなくなります。方法はいくつもある手段の一つであり、研究過程で洗練されていくからです。逆にどのように緻密に組み立てられた方法でも、研究の意義が伝わらないと、「悪くはないけど…」という印象になるようです。

村上史朗先生（奈良大学）

昨年度に引き続き、今年度も担当させていただきました。今回の申請書のレベルも平均的に高く、A候補を選出する際には非常に悩みました。今回受賞に至らなかった研究計画にも良質のものが複数ありましたので、審査者の見る目がなかったと認めさせてくれるような成果を出していただけることを期待します。以下、個人的な評価の基準について述べさせていただきます。完成度の高い研究計画、意欲的なチャレンジを見据えた計画共に評価したいと考えましたが、両者の評価ポイントは少し異なります。比較的堅実な研究計画の場合、「目的、仮説、方法の一貫性」が確保されていることは当然として、期待される成果のインプリケーションを重視しました。堅実な計画は完成度を高めることは比較的容易ですが、類例となる研究は既に多数あることが多いため、それらと差別化するポイントとして「応用的意義」「学術的意義」「他の研究の呼び水となりうるか」などに注目しました。一方、チャレンジの要素が強い計画では、応用的意義と学術的意義のいずれかは基本的に十分です（そうでなくてはそもそもチャレンジになりませんので）。一方、目的が大きくなりやすい分、直接当該研究で検討する内容が「目的のどの部分を扱っているのか」が不明確になりがちなため、目的と検討内容の対応が明示的に説明されているかを重視しました。審査者が変われば重視する側面も変わりますが、ご参考になれば幸いです。